

## Q-U を用いた生徒理解のための P-D-C-A サイクル構築の試み

内野成美（長崎大学大学院教育学研究科）

吉田綾子（長崎大学大学院教育学研究科/西浦上中学校）

### 1. 実践の目的

生徒をよりよく理解するためには、日ごろの観察は欠かすことはできない。しかし、それだけでは様子が見えにくい場合や、主観的になり“そう思うのだけれども”いまひとつ自信がないというような事態に陥る場合もある。そのため、本実践では、日常の様子を観察することに加え定期的に客観的なデータを用いることにより教師の視点を増やし、学級や生徒についての実態把握を深め、生徒個人や学級集団にとって居心地のより学級づくりをめざす授業づくりの提案・提供を行うことを目的とした。

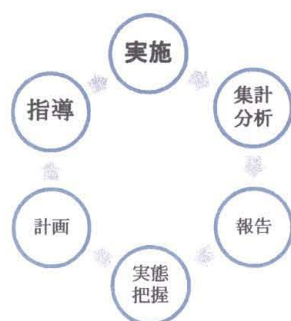


図1 P-D-C-A サイクル

～本報告書での P-D-C-A サイクル～

生徒理解のためのアンケート等を実施し、それを集計分析した後、結果を報告し、生徒の実態把握に努める。実態把握後は、その学級集団や生徒の実態に合わせた指導や支援方法を計画・実践し、その後、アンケート等で、継続する点や見直し点を検討し、再び実践する。

### 2. 方法

#### (1) 対象

長崎市内 A 中学校

1 年生 143 名 2 年生 150 名 3 年生 176 名 合計 469 名

#### (2) 実施時期

平成 22 年 6 月～11 月

#### (3) 内容

○6 月…1 回目の Q-U 実施

○7 月…1 回目の校内研修

夏休み初めに以下の内容で校内研修を行った。

- ①アンケートで用いた Q-U 検査用紙の見方の説明
- ②6月の調査結果についての報告
- ③担当学年別での情報共有のための話し合い

○8月…Q-Uの結果をふまえ、指導法の確認および2学期初めの授業参考資料配布（エンカウンター等）

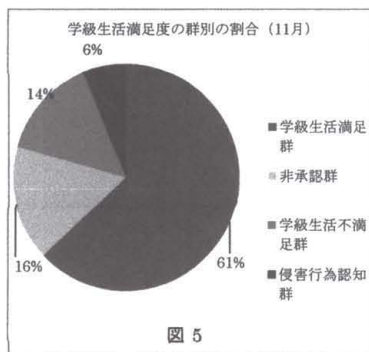
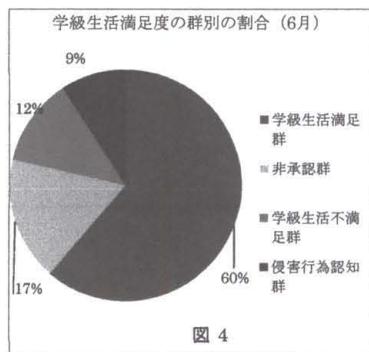
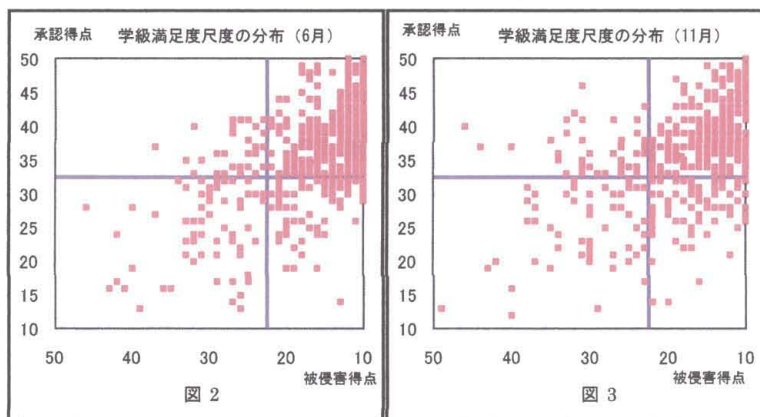
○2学期…学級活動、道徳における授業内容作成、授業実施（2年生）

○11月…2回目のQ-U実施

○11月…2回目の校内研修 報告・今後の支援法の検討について

### 3. 結果

(1) Q-Uの6月から11月にかけての変化



6月と11月では、数値的には大きな変化は見られなかった。

しかし、学校生活不満足群に属する生徒は9%から6%と減っており、学級生活の中で居場所を見つけることができた生徒が増えたことが推察される。また、リレーションが高いとされるプロット上半分の学級生活満足群と侵害行為認知群を合わせると62%から65%へと増加しており、自分を認めてくれる人がいると感じている生徒が増加していることがうかがわれた。また、この2つの群に関しては、学校生活意欲の「教師との関係」の項目において1回目と2回目では有意な差が見られ2回目の方が高かった。このことから、もともとリレーションの数値の高かった学級生活満足群と侵害行為認知群では、教師との関係において更にリレーションを高めたという結果となっていた。しかし、その一方、非承認群にはあまり変化が見られなかった。このため、被侵害感情は低いものの認められていないと感じている生徒に対する支援は、今後、さらなる工夫が必要であると考えられる。実際の場面でも、表情が乏しかったり、学校行事に対しても積極的に取り組めていない様子であったりした生徒には変化が見られなかった。

## (2) 校内研修②

- 1) 目的 7月に行ったQ-Uに関する研修会の後、実態の確認、2学期に向けて支援方法・対策等を検討することを目的とした。
- 2) 対象 A中学校教師 19名
- 3) 時期 夏休み
- 4) 方法 各学年に分かれ、実態把握の共有化及び支援法の検討を行った。
- 5) 各学年での内容

### 3年部会

- クラスの学校生活不満足群の名前を出し合って様子を情報交換した。
- 非承認群・学校生活不満足群に記載されている生徒についての実態・および観察後の様子を確認した。
- 担任教師が気付いていなかった非承認群に属する生徒の状況を、他教師（部活動・教科担当・行事の取り組み等）から意見を聞き確認した。
- 具体的な支援方法（教育相談等）の確認をした。
- 2学期の学級開き・合唱コンクールについての取り組みについて、資料をもとに、学級にどう働きかけていくか等を話し合った。

### 2年部会

- 非承認群・学校生活不満足群に記載されている生徒についての実態・および観察後の様子を確認した。（その他、気になる生徒をあげ、確認を行った）
- 夏休み、部活動時の教育相談を実施した。
- 2学期初めの学級経営について各学級から意見を出し合い、学級活

動に構成的グループエンカウンターを取り入れる計画を立てた。

### 1 年部会

- 非承認群・学校生活不満足群に記載されている生徒についての実態・および観察後の様子を確認した。(各群の名簿作成を行い、気になる生徒をあげ、行動・支援の方法についての確認を行った。)
- 中学校に入学後、合唱コンクールという行事を初めて体験するため、その取り組みに関する道徳・学級活動の時間をどう扱うかについて担任教師からの意見交換を行った。

## 6) 成果と課題

(教師の感想より)

- 2学期の学級開きについての計画を立てたことで、学校行事(合唱コンクール)等について取り組む意識づけが行えるようになった。
- お互いのクラスが同一歩調で動く事ができるようになった。
- 個に応じた言葉かけ等を行うように心がけるようになった。
- 教師同士の理解が進んだ。
- 来年度にむけて、学級活動のカリキュラムの中に生徒理解の時間の位置づけを行いたい。
- 気になる生徒に対する具体的な指導法の理解を学びたい。
- 教師同士がお互いに共通理解をする場や時間をきちんと設定したい。

## (3) 校内研修③

- 1) 目的 校内研修②をさらに深める形で、それぞれの教師が持っているスキルを出し合い、どのような方策を行えば、生徒が“居心地が良い”と感じられる学級づくりができるかを話し合うことを目的とした。
- 2) 対象 A 中学校教師 16名
- 3) 時期 夏休み期間
- 4) 方法 小グループを作り、Q-Uの結果をもとにK-J法を用いて意見を出し合った。
- 5) 内容 グループごとに以下の手順で実施した。
  - ①各グループの事例提供者は、Q-Uの結果をもとに、表1の資料を用いて学級の様子を整理し発表を行う。
  - ②参加者は、事例提供者の発表から学級の問題が発生した要因や、それが現在も続いている要因について考え、できるだけ多くカードに書きだす。
  - ③全員のカードを集めて似ている内容ごとに分類し、1枚の画

- 用紙に張り付け、それぞれの画用紙にタイトルをつける。
- ④③の画用紙を重要だと思う順番に並べ、それぞれの理由を発表し参加者全員で意見をまとめる。
- ⑤対応策について②～④と同様の手順で作業を行う。
- ⑥各グループでまとめた意見を全体に発表する。

表1 K-13法の事例提供の内容

◇ 学級集団の背景:	学校	学年	人数	名(男子	名、女子	名)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校の特徴・・・</li> <li>・ 学級編成の状況(持ち上がり等)・・・</li> </ul>						
◇ 問題と感じていること						
◇ 学級の公的なリーダーの児童・生徒(番号と簡単な説明)						
◇ 学級で影響力の大きい/影で仕切のような児童・生徒(番号と簡単な説明)						
◇ 態度や行動が気になる児童・生徒(番号と簡単な説明)						
◇ プロットの位置が教師の日常観察からは疑問に感じる児童・生徒(番号と簡単な説明)						
◇ 学級内の小グループを形成する児童・生徒(番号と簡単な説明)						
◇ 4群にプロットされた児童・生徒に共通する特徴						
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 満足群・・・</li> <li>・ 非承認群・・・</li> <li>・ 侵害行為認知群・・・</li> <li>・ 不満足群・・・</li> </ul>						
◇ 担任教師の方針						
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学級経営・・・</li> <li>・ 授業の展開・・・</li> </ul>						

(河村他, 2008) より

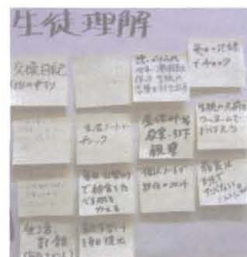
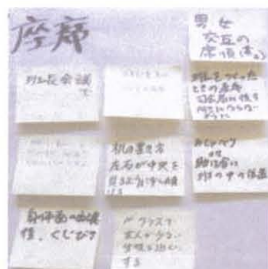
## 6) 結果

研修の中では、各グループで活発な意見の交換が行われていた。出された内容の主なものは、以下の通りである。

学級づくりのテクニック、朝の会・帰りの会の取り組み、

学級掲示の仕方、スピーチの方法について、座席の決め方、生徒同士の交換日記による学級づくり、など

#### 校内研修での K-J 法の様子



#### 実施後の感想より

- 今まで独自で学級経営を行っていたが、それぞれの先生の経営のアイデアを知ることができた。
- 2 学期に自分のクラスに取り入れやすいものから取り組みを行っていきたい。
- 取り組みやすい内容があったので、班ノートの交換や掲示方法の工夫等、すぐに取り組めるものについては、直接アドバイスを聞きながら検討することができて良かった。

#### 4. Q-U およびその後の行内研修についての教師への事後アンケート

6 月から 11 月まで、全ての実践が終了した時点で、協力学校の教師に対してアンケートを行った。調査は、教職年数、性別、Q-U 実施の経験回数、Q-U を行って役立ったと思われる内容、実施の難しさとその理由等の項目について行った。

### 1) 調査結果

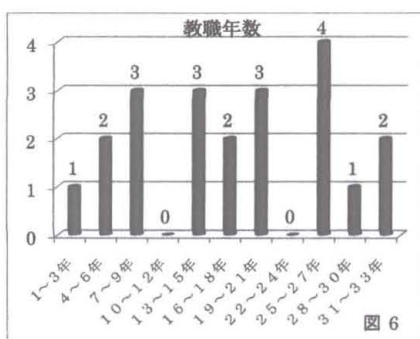


図 6

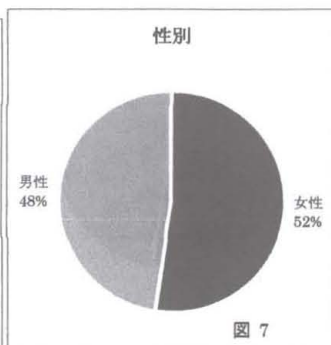


図 7

アンケートに回答した教師の教職歴は25年から27年が最も多く4名であった。その後、7年から9年、13年から15年、19年から21年と続き、平均は17.6年であった(図6)。性別は、男性が48%、女性が52%であった(図7)。

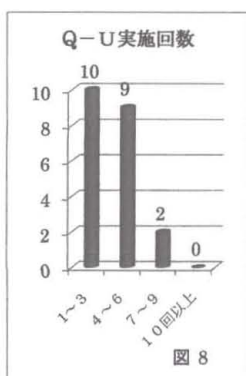


図 8

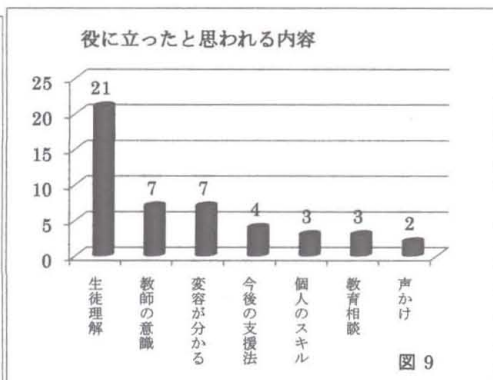
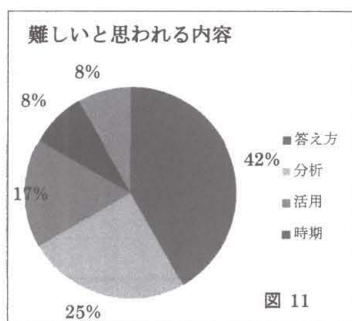
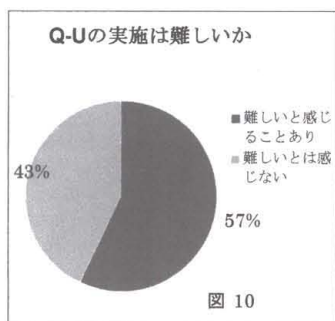


図 9

Q-Uを実施した回数は1~3回が最も多く、その後4~6回であった。これまでに10回以上実施したと回答した教師はいなかった(図8)。また、Q-Uを実施し、役に立ったと思われる内容は、『生徒理解』が最も多くアンケートの回答者全員が役に立ったと回答していた。その後、『教師の意識が変わった』や『生徒の変容が分かる』を挙げた教師が全体の3分の1となっていた(図9)。





Q-Uの実施に関しては、難しいと感じるところがある教師が57%であった。その理由としては、『答え方』が42%、『分析の方法』が25%であった(図10, 図11)。

アンケートでは、Q-Uを実施して良かったという声が多く、来年度も引き続き実施していきたいということであった。また、今までの教育相談の方法が変化したという意見や、言葉かけに留意して生徒に接することができるようになったという感想も聞かれ、今後も教育相談についての効果が期待できると思われた。

## 5. まとめ

今回は、生徒をよりよく理解するための試みとして、日常での観察に加え、客観的なデータを用いてP-D-C-Aサイクルの流れを作ることを目的とした。支援の流れをP-D-C-Aのサイクルに沿って提示し、D(Do)では、Q-Uの意義や結果の見方・今後の支援法等の研修を行い、C(Check)では、配慮が必要な生徒への今後の支援方法についての話し合いを行った。

夏休みには、Q-U実施後の2学期には、先生方から、教室の中であまり目立たない生徒や生徒指導上問題がないと思われる生徒の様子を気がけ観察し、声かけをするようになったという声もいただくことができた。そうした中、担任教師が教育相談を行っている時、楽しく学校生活を送っていると思っていた生徒がQ-Uアンケートをきっかけに悩みを打ち明け、「先生が分かってくれた」と、とても喜んでいたという話を伺うこともでき、今回のQ-Uの実施やその後の研修は一定の成果があったものと思われる。

今後もこのP-D-C-Aサイクルを継続し検討を続けていく中で、より良い生徒理解と効果的な生徒指導・教育相談の一助となるように努めていきたい。

## 参考・引用文献

- 河村茂雄(2010) 学級集団と学級経営 図書文化  
 石隈利紀・田村節子(2003) チーム援助入門 図書文化  
 河村茂雄他(2008) Q-U式学級づくり 中学校 図書文化